

# 「二住生活」のすすめ

松田 力 *Written by Tsutomu Matsuda*

「二住生活」とは、一言で言うてしまえば、都市と田舎に二つの住まいを持つて、それぞれのいいところをいただきながらの調子いい生活ということになる。一重の経済で二重の住居費にならぬよう、生活空間に求めるモノを二箇所に分ける住まい方といえる。私は賃貸派建築家とも呼ばれることもあって、東京ではもっぱら賃貸のマンションに暮らしているが、お山に本宅があれば、都市の住まいに求めるモノはさして多くはない。どんなところであつても楽しく生活できてしまう。

住宅の設計などの仕事も多い私ではあるが、仕事から、人の生活と住まいについては常に考えている。私は建築雑誌や婦人雑誌などのページを飾る革新的なデザインを好まない。どちらかといえば、社会的見地から住宅の設計を行っているので、世間様から注目されるような建築家にはなり得ない。人が生きてゆく中で雨風を凌げるシェルターを必要としない日は一日たりともないわけだが、その時々で住まいに求める空間や機能は異なっ

ていることを認識すべきだと思う。人にはライフステージがあるわけで、家族とともに過ごす住まい方は常に変化している。私は、可能な限り、その時々にあう空間に住んでいたいと思っている。アバンギャルドな芸術性の高い家も悪くはないが、そんなところに人は長く住んではいられないと思っている。



ベランダで寝るぜいたく

十分な土地のある田舎の住まいであれば、本来の日本人としての生活空間はどのような形であれ成立する。縁側などの窓を大きく取つて、自然の呼吸ともいえる柔らかな風を室内に取り込み、沢山の日射しや日照を得て、そこに近隣との柔らかなコミュニティがあれば、健康で平和な日常を送れる。祖父母を含めて子供たちがいる家族が、それぞれのライフステージに合致するような住まい方が許されるほどの広さを持ち、嫁姑の問題を含め各種の軋轢を抱えながらも、かなりのフレキシビリティを持つて住まいが成立する。」。ちゃんもつ中学に行くんだから自分の部屋があつてもいい」との判断があれば、その様な住まい方ができ、離れにはこ隠居のおじーちゃんが悠々自適に余生を楽しむ空間も持ち得る。

しかしながら、高度経済成長と団塊の世代が作りだした現代の核家族のための都市住宅にそんな生活はないし、空間もない。わずかに二十坪前後の空間を、幕の内弁当よろしく3LDKに間仕切り、窮屈に生活している。そこには、経済の論理が優先した、売れる住宅、貸せる住宅の姿しかなく、常に住みにくい住まいに甘んじなければならぬ不幸しかない。

都市に住んで都市で仕事をしている日本人としての勤労者及びその家族のための住まいのあり方について、いまだ確固たる提案がない。都市に建つ戸建て住宅などの場合には、それなりの将来の改築を前提とした設計の

工夫があつて当たり前なのだが、私を含めた一般の勤労者には、都心に土地を買つて住まいを建設できるほどの財力はない。となると、分譲マンションで我慢するか、とはあまりに短絡的だ。人が住まいに求めるモノは常に変化するし、わがままで、時に矛盾さえしている。ちよつと考えれば、単身でいるとき、同棲・DINKSの二人のとき、子供が乳幼児のとき、小学生のとき、中学生のとき、成人としての大学生や社会人のとき、子供独立後の二人のとき、それぞれのライフステージには、それぞれの生活空間が要求されることは理解できると思う。一つの生活空間に五、六年も住んでいれば、そこはすでに住みにくい所となつていくのだから、分譲マンションなど買つたら、すぐに住みにくくなることは明らかである。

銀行や証券会社などの総合研究所が、分譲のマンションを買う方が得か、賃貸を借り続ける方が得かの経済的な指標を何度となく発表している。どちらもほぼ大差ない状態で、若干賃貸の方が得との結論が多い。ならばリスクを回避する意味でも、賃貸の方がいいに決まっている、というのが私の考え。最近では地震の心配もある。分譲であれば地震で建物にダメージを受けると、その額は半端ではない。住民同士の話し合いも面倒なことになる。姉姪事件のよつなことにも巻き込まれないとも限らない。いまだはつきりとは解析されていない長周期振動などの問題もあり、



娘との2人だけの週末を楽しむ



南側に張りだした大きなベランダと「宅庵」全景

建物は残つてもエレベーターやトイレなどの設備が心配になる。しかしながら、賃貸を借りている場合には、その負担リスクは全く生じない。住めなくなつたら引越すだけですむ。リストラや不況にあつてもローン返済の重圧がない気楽さは捨てがたい。

そして何といつても、週日の仕事で家族に不義理を課しても、週末は嫌というほどの家族との時間が自然の中にある。私のお山の家の生活は、東京のオンの生活に対して、オフの生活の意味合いが強い。緊張感のない格好で、自らを解放し怠惰に生活したいからこそ、毎週末、山の家に帰ってくるのだ。オフの生活の中に、わざわざお金をかけてまで都市の住宅に求める機能を持ち込む必要はなく、身だしなみだつてオフでいいし、東京で

は考えられないような大きなベランダに布団を敷いて、青天井の下でゴロゴロしていれば、週日の仕事も、いくらでも頑張れるというモノだ。  
金曜の夜に、家族みんなでお山に向かう。運転するのは私、隣に娘が座つて、学校での出来事や今話題の諸々のニュースが会話に上るのが嬉しい。ワイフが座るとかなりの長時間愚痴を聞かねばならないので注意が必要ではある。片道三時間近いとはいえ、家族との会話の時間は貴重であり、子供たちが何を考えているのかなんとなく判断がつく。いろいろな話の中に親としての見識も要求される。今の時代、親子で毎週こんなに会話しているうちは少ないと思う。

CEL

## 松田 力(まつだ・つとむ)

建築家、エッセイスト、松田建築設計事務所代表、愛知産業大学非常勤講師。1950年東京生まれ。日本大学理工学部建築学科卒業。カンサス大学大学院建築/都市計画研究科修了。国内外の建築設計事務所勤務を経て現職。米国にてマイケル・トリポリ賞受賞。雑誌や新聞等でエッセイストとしても活躍。主な著書は、『都会に生き、山に暮らす。』(二玄社)、『週末は田舎暮らし』(創森社)、『二住生活のすすめ』(同朋社・角川書店)など。

URL: <http://www011.upp.so-net.ne.jp/tmatarch/>